

ストーリー・マンガ「美味しんぼ」を用いた日本語教育の一例 —語用論的な学習の可能性—

A Case of Teaching Japanese Using Manga “Oishimbo” —The Approach to Develop the Pragmatic Competence—

青野 潤子
AONO Junko

本稿では、中級以上の日本語学習者に、日本語の談話の特徴や文脈における語用論的機能、また、日本的な価値観を学ぶ手法の一つとして、ストーリー・マンガを用いた学習を試み、その有用性について確認した。従来の新聞や雑誌の記事、短編小説などの教材と比べて、主に話し言葉を用い、その場面と共に話し言葉が提示されるマンガでは、言語文脈や非言語文脈^{注1}における言葉の意味や、敬語を含む広い範囲の文体的要素の意味の解釈及びその使い分けの学習が可能であることが示唆された。

キーワード：マンガ，敬体，話し言葉，ポライトネス，言語行動，FTA（相手の体面を脅かす行為）

Key Words : Manga, Honorifics, Spoken Mode, Politeness, Speech Act, FTA (face-threatening acts)

1. 背景と目的

昨今のアニメ・マンガブームに影響を受け、日本語学習者の中にもそれらに関心を持っている学生が数多く見られる。2017年現在、世界の漫画市場で日本作品のシェアは27%に上り、アニメ（同4%）やゲーム（同15%）に比べて高いものになっている¹⁾。また、日本ではマンガを原作とするアニメは全体の60%以上と言われており、アニメがオリジナルの作品もマンガ化されることが多く、アニメとマンガは相互に深いつながりを持っていることがわかる²⁾。また、マンガのジャンルは多岐に渡っており、学習者にとって日本語理解のための多様なコンテキスト^{注1}を提供するツールになると思われる。

本稿では、日本語教育において学習価値を持つマンガの研究が少ないという現状を踏まえ、日本語学習者に適したマンガ教材を選択しその有用性を検討する。そして今後、読解授業の応用力養成のために、中級以上の日本語学習者にマンガ教材を提供し、日本語の表現形式や談話の習得に役立てることを目的としたい。

2. マンガ教材の長所と問題点

マンガは絵が中心となり、セリフや心の中のつぶやき、モノローグで構成されており、文字と共に視覚情報を連続的に伝える媒体であるため、他の文字媒体に比べて話の筋を掴みやすいという利点がある。しかし、マンガは手軽な読み物である半面、話の筋を直観的に理解するだけでは、ストーリーを総合的に観察できるという長所を生かすことにならないばかりか、日本語や日本社会について偏った見方や過剰な一般化を促すことにもつながる³⁾。そのためストーリー・マンガの発話内容や言語行動の綿密な分析が必要とされる。

3. マンガの選択基準

マンガの選択基準については、因氏によると「①現実的な設定の作品、②多様な人間関係を含む作品、③考察や議論を行うための話題を含む作品」⁴⁾が望ましいとされ、その理由として「「社長を叱り飛ばしてしまえるOL」など、実際には存在し得ないスーパーヒーローが登場するような作品は、現実性に欠けるため、日本語の言語使用の様相を観察するには適切

ではない。また、原則としてこども向きのものは、人間関係が単純で言語使用に影響を与える社会的要因が観察できないので適切ではない。学習者の動機を刺激するためには、学習者が強い関心や批判や共感を覚えるような出来事や人物を提示していることが望ましい。発表者は、学習者が観察を次第に深めていくことを期待して、一つの学期には一つの主題を決めてその主題に関連した作品を用いるようにしている」⁴⁾と述べている。

上記の理由から、筆者が日本語教材として使用可能なマンガを検討するにあたり、分析を試みたが選択に至らなかった作品は、さくらももこ『ひとりずもう』、佐々木倫子『おたんこナース』、山田貴敏『Dr.コトー診療所』、ハシモト・松駒『ニーチェ先生』、ヤマザキマリ『テルマエ・ロマエ』、東村アキ子『かくかくしかじか』、福田幸江・吉城モカ『僕はコーヒーがのめない』、末次由紀『ちはやふる』、小山宙哉『宇宙兄弟』、秋本治『こちら葛飾区亀有公園前派出所』等である。これらは現代に即したテーマや内容の面白さがあり、中には今回取り上げた『美味しんぼ』には見られないモノログや心の中のつぶやきが豊かに描写された作品もある。しかし、『美味しんぼ』は敬語使用や談話の構成が巧みであり、登場人物の人間関係が丁寧に描写され、「食」のみならず「親子関係」という人類共通の普遍的なテーマを扱っている点が、日本語学習の優先事項として重要であると認識したことから、教材として取り上げるに至った。

学習者にとって日本語の敬語体系は特に複雑であると言われる。今回取り上げた『美味しんぼ』は、社会の上下関係あるいはウチソト関係を適切な敬語で表現した作品である。登場人物が敬語や普通体を場面に応じて使い分け、日本的な価値観や美意識で行動している点においても注目できる作品である。

4. 調査概要

4-1 作品

雁屋哲作、花咲アキラ画『美味しんぼ』小学館刊から、表1に示した場面を取り上げた。

表1 取り上げた場面とその「ポライトネス理論」による方略

事例	場 面	目標・検討する機能	Brown & Levinson のポライトネス理論によるそれぞれの方略
1	94巻 第1話 「いやしのカニ料理 前編」	[公的及び私的な場面での指導者の様々な表現形態を理解し対応できる] 乱暴で直接的な言葉と、その背景や発話の効果	①あからさまに言う
2	94巻 第1話 「いやしのカニ料理 前編」	[聞き手に不快な表現の意図を理解しやり取りができる] 親切な行為の場面で、丁寧体でありながら、失礼な言葉を使った発話の効果	②積極的配慮を示す言い方を する
3	111巻 第1話 「福島の真実(12)」	[明瞭な言語表現以外の伝達手段を理解できる] 対話中に言葉で意思表示をしない「沈黙」の効果	⑤FTAを行わない
4	111巻 第1話 「福島の真実(12)」	[相手の立場を考えながら意見を言うことができる] 聞き手に何らかの圧力がかかるような行為をとらない「説得」の場面での発話効果	③消極的配慮を示す言い方を する
5	111巻 第1話 「福島の真実(14)」	[曖昧な文の含意や行間の微妙な意味を想像できる] 「同じ言葉を繰り返す」発話の効果、 「言外にほめかし曖昧にする」「比喩表現を使い含意を持たせる」発話の効果	②積極的配慮を示す言い方を する ④オフ・レコード
6	94巻 第4話 「降り積もる鍋」	[感謝や尊敬の気持ちを表現できる] 色々な立場で使われる敬語の効果	②積極的配慮を示す言い方を する ③消極的配慮を示す言い方を する

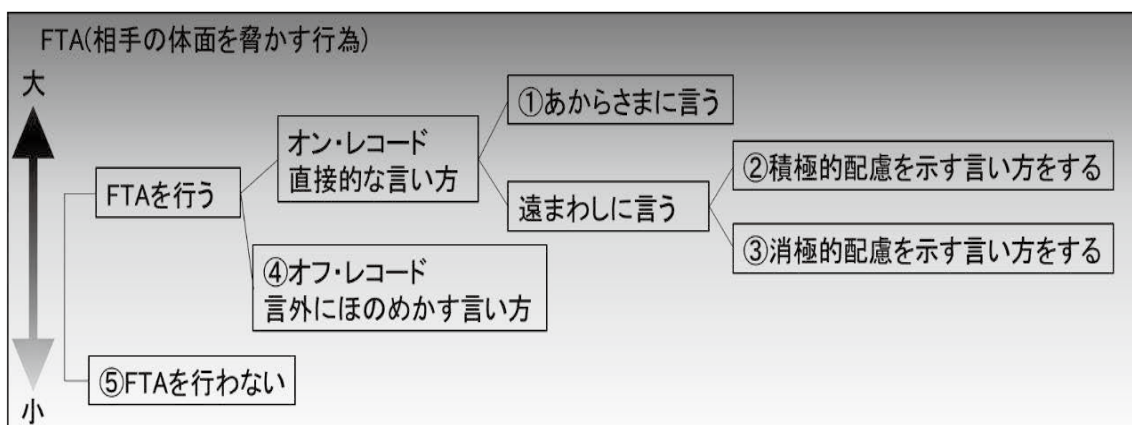


図1 FTAを行うための可能な戦略⁵⁾ (一部改訂)

4-2 対象者と調査方法

マンガ教材を利用した読解調査の対象者は、奈良佐保短期大学に在籍する韓国語及び中国語が母語話者の留学生5名であり、学習者は日本語能力試験N2以上のレベルである。調査は2017年10月25日に1コマ90分で実施した。教師による作品の概略と登場人物の説明後、各自で教材作品を読みタスクシート(付表1)に書き込む作業を行った。

4-3 取り上げた場面の解釈法

言葉の実際の使われ方とそれが聞き手にどのように伝達、解釈され、話し手との相互行為に影響を与えるかに関わる様々な研究を、広義に語用論と呼ぶ⁶⁾。本稿は「コミュニケーションは文法的な知識のみによっては達成できない」とする語用論の共通認識に基づいて、発話行為に見られる語用論的現象を説明していく。その際、主観的な分析をできるだけ排除し、発話の意味を特定するために、次の「①ある発話の聞き手に対する発話媒介効果、②話し手による明示的な注釈、③他人による明示的な注釈、④文脈(後に続く談話)」の論拠⁷⁾をもとに観察する。

また、本稿では、言語学において日本語の「丁寧さ」という意味では捉えきれない概念である「ポライトネス」を語用論的・コミュニケーション的現象であると見なし、Brown and Levinsonによる「ポライトネス理論」の方略を枠組みとして、今回取り上げた場面の解説をしていくこととする。Brown and Levinsonは「ポライトネスとは対話者が互いの面子の保持および人間関係の維持を配慮し、円滑なコミュニケーションをめざす社会的言語行動であるとし、言語表現によるポライトネスは言語的配慮行動とみなす⁸⁾」としている。言語行動で人が相手とやり取りをする時の行為を、「相手の体面を脅かす行為」FTA(face-threatening acts)と考え、話し手はできる限り相手の体面を傷つけないように、図1の方略を使用するとしている。

5. Brown & Levinsonのポライトネス理論により内容を読み取る

5-1 直接的な表現

一般的な教材で学習してきた学習者は、その例文により日本語を婉曲的な言語だと認識することが多い。しかし実際の場面では、丁寧体や命令形が字義通りの文体的特徴を常に反映しているとは限らない。丁寧体であっても相手に敬意を表する意図を持たない表現や、命令形でもそれ以外の意図を持つ表現ということもあり得る。

事例1では、乱暴で直接的な言葉を取り上げ、その背景や発話の効果を検討した。

事例1:『美味しんぼ』94 第1話「いやしのカニ料理 前編」より(図2)

主人公の山岡士郎とその妻栗田ゆう子は新聞社に勤めている。士郎の父である芸術家にして美食家の海原雄山とは、母の死をきっかけに対立している。チヨは士郎が幼い頃から海原家のお世話をしている、士郎にとって母代わりの女性である。物語は母の死後、関係を絶っていた父子が、料理を通して再び接点を持つことになり、彼ら親子とそれを取り巻く人々

が料理対決で奮闘する。以下の会話は料理対決の会合場面である。

上司A：どうだ？山岡、栗田くん。

士郎：カニですか。

栗田：は…はい……

上司B：栗田さん どうした！

栗田：すみません。風邪をこじらせて熱がひどくなったようです。

雄山：馬鹿者！そんな状態で出てこられては迷惑だ！早く帰れ！（下線は筆者による）

士郎：ぐむ。

栗田：申し訳ありません……

（翌日、雄山は世話役のチヨに、栗田は食欲がなくて何も食べられなかったことを聞いた）

雄山：昨日は何を食べさせたんだ？

チヨ：お粥にカレイの煮付け、出汁巻き卵、春菊の胡麻よごし。それに白菜の漬け物、豆腐のおみおつけ。

雄山：そんなものでは食欲が出るわけがない。気が停滞しているのだから、はっと目が覚めるようなものを食べさせればよい。

チヨ：なるほど。目が覚めるようだと胃も動くというわけですね。

下線部は命令形や断定の強い文体で雄山が息子の嫁である栗田への叱責として、図1「①あからさまに言う」にあてはまる発話である。人前でも容赦なく病人を怒鳴りつける雄山に対して誰も逆らうことができない。しかしその後、雄山は栗田が食べられるものを提案し身内の者に作らせる。雄山が物事に対して、妥協は許さないという厳しい信念を持ちながらも、筋が通った人間であることを誰もが認めているという設定である。

雄山の発話には、聞き手への配慮を伺わせる表現がなく威圧的だが、談話の流れを見ると、栗田が何を食べたのか尋ねアドバイスをするつもりなのが見える。チヨの返答にも、雄山に対して恐れることなく平然とした様子が伺われる。雄山は厳しい言葉の奥に、人に対する真心や家族への思いやりを抱いていることを、身近な人は感じている。

一般的な教材では、このような人物を扱った場面設定のものはあまり見当たらない。学習者は雄山をどのような人物と解釈するだろうか。これを単なる叱責と捉えると雄山の人物像を誤解してしまうため、談話の流れの中で発話を読み取ることが大切である。事例1から考えられる雄山の言葉遣いの印象と人物像について、留学生の回答を以下に記した。

【雄山の言葉遣いについて】

- ・非常に失礼、命令形でひどい言い方。
- ・乱暴。
- ・言葉が悪い。

【雄山の人物像について】

- ・優しさのない怖い人。



図2 事例1のシーン⁹⁾

- ・ 礼儀を重視する。
- ・ 他人の前では冷たいが家族をいつも気遣っている。
- ・ 見かけは怖くて厳しいが実は優しい。
- ・ 命令が好き。
- ・ 栗田に関心がある。
- ・ 表面は頑固だが栗田を心配し食事のアドバイスをしていることから心は優しい。

このように全ての学生が雄山の言葉遣いは命令体で乱暴なものとしている。そのため「優しさのない怖い人」と答えた学生もいるが、「本当は気遣いのある優しい人」と答えた学生も多かった。

事例1では、文脈の流れから必ずしも言葉遣いと心情は一致しないことを読み取り、人物像を的確に判断できたかどうかを確認した。日本の言語社会において、「①あからさまに言う」行為は周囲の空気を気まづくするが、雄山のような人物が常人の域を越えた発想を口にし、再び周囲を驚かせるといった場面設定の意外さにも今後は言及していきたい。

5-2 「丁寧表現」による方略

事例2では、親切な行為を行っている場面で、文体は丁寧体でありながら、失礼な言葉を使った発話の効果を検討した。

事例2:『美味しんぼ』94 第1話「いやしのカニ料理 前編」より(図3)

栗田ゆう子は病気で食欲がなく、何も食べていないと聞いて、心配した会社の同僚とチヨ達が、士郎の家に食欲が出る料理を作りに来たときの会話である。



図3 事例2のシーン¹⁰⁾

士郎：なに？ “栗田さん救援隊”？

同僚：あ、山岡さん、邪魔やから隅っここのほうへすっ込んでっす。

士郎：ここは俺の家だぞっ。

チヨ：まあまあ、士郎さん。

下線の文体は丁寧体になるが、「邪魔」や「すっ込む」という言葉を使っている。そのため、同僚のお見舞いは親切な行為として捉えられるが、言葉遣いは失礼な印象を与えている。このような発話を学習者はどのように解釈するのか、以下に回答を記した。

【発話に問題はないとした回答】

- ・ 仲良い関係なので怒っている様子も冗談として捉えられるような友達関係である。
- ・ 怒った態度を見せたが、妻のために来てくれたことは内心感謝している。

【発話に問題があるとした回答】

- ・ 「邪魔」や「すっ込んでっす」など命令の言葉から優しさが感じられないため、うれしいきもちではない。
- ・ 「てください」は軽微な命令の意味があるが、自分の家で隅にすっ込まれるのは無理であり不思議な感じ。
- ・ 士郎の自宅でありながら、邪魔者扱いされ怪しく思う。

このように士郎の気持ちについて学習者の意見は二通りに分かれた。一方は気心の知れた関係なのでこの会話に問題はないとした回答であり、他方はいくら同僚でも言うべきではない言葉を発したことで、少なからず聞き手を傷つけたとした回答である。両者の意見が示しているように、この発話は無作法な意図かポライトネスな意図かということになり、発話媒介効果が大きいと言える。無作法な意図の場合、丁寧体を使っても命令のような伝達内容であるため、相手を怒らせ円滑な会話にならないことがある。また、ポライトネスの意図とすれば、冗談を用いた図1「②積極的配慮を示す言い方をする」行為となる。解釈に

については士郎と同僚の平素の談話ポライトネスの質、およびコンテキストの両方を考慮して判断されることになり、文脈に依存した語用論的特徴が見られる発話だと思われる。一般的に丁寧体の使用は相手との距離を保つ方略であり、冗談ができる親しい間柄での発話に敬語が用いられるときは、福田氏が指摘しているように「わきまえ的一線が保持される」¹¹⁾ ことになり、この場面のような微妙なやり取りになることを今後示していきたい。

5-3 「沈黙」による方略

事例 3 では、対話中に言葉で意思表示をしない「沈黙」の効果を検討した。

事例 3 : 『美味しんぼ』 111 第 1 話「福島の真実 <12>」から (図 4)

士郎は父が病気の母を無理に働かせたと思い込み、母の死後に家を出て父と断絶していたが、ここではこれまでの状況を大きく前進させる展開となった。士郎は雄山らと料理対決の取材のため母の故郷を訪れた折、雄山から母の形見であるという皿を譲り渡される。

雄山：おまえにやる。

士郎：〈白磁の皿！〉

雄山：士郎は家を出て行く時に私の作品蔵に入って私の作品すべてをぶち壊していったが、運良くこの皿だけは私の自室の戸棚に入っていたので無事だった。

栗田：ご自分のお部屋に大事にしまわれていたんですね。

雄山：着の身着のままでおまえは出ていった。母親の形見を何も持っておるまい。

(士郎は無言のまま皿を抱きしめている)



図 4 事例 3 のシーン¹²⁾

ここのエピソードは、雄山から母の形見の皿を渡された士郎が、皿を抱え込んで無言でうずくまってしまうという場面である。この「沈黙」は図 1 「⑤FTA を行わない」ものとして回避的方略と呼ばれているが、その意味機能は拒絶、戸惑い、受け入れ、喜怒哀楽の感情など多様である。士郎の「沈黙」の背景にある気持ちを、学習者に考えてもらった。

- ・母との思い出がよみがえりただ感動している。
- ・父への思いがけない気持ち、恨みと感謝の入り混じった気持ち。
- ・母への思い、両親の関係をもう一度見直すと、自分が頑固だったのではと思った。
- ・母への思い、両親の愛情に感動し今後の父との関係を考えている複雑な気持ち。
- ・父が母を大切にしていることを知り、何も知らなかった自分がバカだったと思い悔しさでいっぱい気持ち。

このように、ほとんどの学習者は、この場面から父子の立場が変化することを予期した。士郎の気持ちは発話からは不明であるが、マンガのコマ描写によって、その「沈黙」に内省的な感情が含まれていることを学習者は察している。「沈黙」は、文脈の中でコミュニケーションとして成立していることが学習者の意見から観察された。

5-4 「説得」による方略

事例 3 のシーンに続くシーンである事例 4 では、聞き手に何らかの圧力がかかるような行為をとらない「説得」の場面での発話効果を検討した。

事例4：『美味しんぼ』111 第1話「福島の実（12）」から（図5）

栗田：山岡さん、お母様の主治医がおっしゃったことを思い出して。

お母様は自分の命のあるうちに海原雄山を芸術家として大成させたいと願ひ、海原雄山も自分が新境地に達するところをお母様に見届けてもらいたいと思った。

お母様が、海原雄山が満足する食事を作るために努力したのは、海原雄山が芸術としての美食を追求するための協力だった。

あなたの両親は深く愛し合っていた。もうあなたに海原雄山氏を恨む根拠はないわ。

（雄山は士郎の肩の上にそっと手を置く）

栗田ゆう子は無言の士郎に懸命に話しかける。栗田の発話は、言葉少ない雄山の代弁とも受け取られる。栗田は士郎に何を望んだと思うか、学習者に考えてもらった回答は以下のとおりである。

- ・士郎の母は自ら望んで夫のために無理をしたのだから母を殺したのは父ではない。栗田はこれ以上父を憎まないでほしいと望んだ。
- ・栗田は士郎の母の死因を客観的に説明し、士郎が雄山を憎む原因を否定した。もう士郎が雄山を憎まないことを望んでいる。
- ・栗田は士郎が母の死を乗り越え、雄山と仲良くなることを望んだ。
- ・栗田は士郎が雄山との親子関係を直し、仲直りすることを望んだ。
- ・栗田は士郎と雄山を仲直りさせたいと望んだ。

このように学習者は栗田の望みを読み取り、栗田が二人の親子関係の修復に向けて重要な役割を担っていることを捉えている。栗田の発話は聞き手にもはっきりとその意図が伝わり、「話し手による明示的な注釈」として示されている。一般的に「説得」という言語行動は、聞き手に何らかの圧力がかかるような行為としてFTAが大きい。しかし、栗田の発話はほぼ全てに普通体過去形を使って出来事を単なる事実として述べていることや、夫婦の会話であることから、士郎へのFTAを極力軽減できると思われる。それゆえ、この「説得」は図1「③消極的配慮を示す言い方をする」方略として、士郎の体面を傷つけなかったと言える。

栗田の「もうあなたに海原雄山氏を恨む根拠はないわ」と言う発話において、小説やドラマなどでよく見られる主張度の強い女性文末詞¹⁴⁾の「わ」が見られる。この発話の最後に心情を述べ、「説得」を効果的にしている。栗田の呼び掛けにも注目すると、芸術家の海原雄山と、義父の海原雄山氏を使い分け、「氏」に尊敬の念を込めて呼んでいる。この文脈では発話内容とともに、文体的特徴からも語用論的な意図が伺われ、親子の和解へつながる言語行動を導いていることを示していきたい。

5-5 「一致」による方略と「オフ・レコード」

事例5では、「同じ言葉を繰り返す」、「言外にほのめかし文末を最後まで言わずに曖昧にする」、その他に、比喩表現を使うことによって文脈の中に含意を持たせる発話の効果を検討した。事例5は事例4に続く親子の和解エピソードである。士郎は雄山から母の形見の皿をもらって以来、徐々に雄山に心を開いていく。ここは、士郎が勇気を出して、初めて雄山にお礼を言う場面である。



図5 事例4のシーン¹³⁾

事例5：『美味しんぼ』111
第1話「福島の真実(14)」
から(図6)

士郎：この皿、一生の宝だ。
大事にする。

栗田：山岡さんが海原雄山
氏にお礼を言った…

雄山：そうか。しかし、な
ぜその皿をさっきか
らずと抱えている
んだ。

士郎：この皿を抱えている
と、長い間俺の心を
閉ざしていた氷が溶
けていくような気が
するんだ。この氷が
溶けたら、俺は息子
としてきちんとした
口を父親に向かって
きけると思う。

栗田：まあ、山岡さん！

雄山：そうか。氷が溶けた
ら言え。私もおまえ
に話したいことがあ
る。

士郎：え、この上俺に話したいことが…

栗田：山岡さん…

士郎：心の氷が砕けて溶ける…苦しい…



下線部はどのような意味であるかについて、学習者の
回答を以下に記す。

- ・長い間父を憎んだ気持ちが段々なくなるという意味。
- ・長い間父を憎んでいたため心が閉鎖的になった。これからは心を開いて父親を受け入れるという意味。
- ・士郎と父の極めて硬い関係が緩んでいくという意味。
- ・士郎がもう母の死で父を憎まないという意味。

学習者は比喩表現について上記のように正確に読み取っているが、文脈の中での繰り返しの効果にも気づかせ、士郎の心の動きが大きいことを示していきたい。

士郎と雄山のやり取りを見ていくと、相互に言葉の反復が見られる。士郎の「氷が溶けていく」に対して、雄山が「氷が溶けたら言え」と呼応し、雄山の「お前に話したいことがある」に対して、士郎が「俺に話したいこと」と呼応している。これらは二人の同意の強調として、一致的態度である図1「②積極的配慮を示す言い方をする」とみなされ、士郎と雄山の心的距離を縮めるという効果を生む。

栗田の発話に「山岡さんが海原雄山氏にお礼を言った…」とあるが、これは「他人による明示的な注釈」である。ナレーションのように客観的に栗田に語らせていることが、驚きとともに事件的なニュアンスを知らせる発話であることも、今後提示していきたい。

さらに、このエピソードには言いさし表現である「…」や、比喩表現などのFTAの回避

図6 事例5のシーン続き¹⁵⁾

的方略が多く使われている。このように文末を最後まで言わずに曖昧にしたり、比喻表現を使うことによって文脈の中で含意を持たせる「オフ・レコード」の方略は、学習者にその意図がわかりにくい表現だと思われるため、今後は文脈の流れをしっかりと把握させていきたい。

5-6 敬語表現の使い方

事例6では、一般的な規範を越えた敬語使用における発話の効果を検討した。

事例6：『美味しんぼ』94第4話「降り積もる鍋」から（図7, 8, 9）

「降り積もる鍋」のエピソードでは、土郎の同僚でもある飛沢が、「至高のメニュー」と「究極のメニュー」の対決を終結することについて、雄山に相談に行ったところ、禅宗の高僧である妙寛和尚を訪ねるように言われる。和尚は飛沢を温かく迎えるが、「至高」も「究極」も実体のないものだから、味覚も極めたものなどあり得ないと言う。それを聞いた土郎は、両者の料理への思いを和尚に伝えるべく、それぞれの「雪鍋」を和尚にもてなし、料理対決をするという設定である。

このエピソードは、妙寛和尚という雄山が尊敬している人物を中心に話が展開していく。和尚は立場に関わらず、いつも敬語を使っているのだが、このことから、和尚はどんな人物だと考えられるか、学習者の回答を以下に記す。

- ・小さいことにもいつも感謝する人。
- ・皆に尊敬される人物、雄山より偉い。
- ・謙虚でいつも人に対して友好的で、平和を重んじる人物、言葉に人生の哲学がある。
- ・人に優しく親切な人、修行をよくし衆生平等の意識を持っている。
- ・悟りが深くいつも謙遜している人物。

通常、敬語は立場が目上の人に用い、自分より若い人や、立場の下の人には使用されないとする。

学習者はこの一般的な規範を越えた敬語使用について、特に不適切だと考えることなく、妙寛和尚の謙虚な姿勢を反映したものとして、その人物を好意的に捉えている。

敬語の乱用は、相手に失礼になる場合もあるが、敬語の使用者がわきまえた使い方をしてしている場合は、学習者の回答からもコミュニケーション上の問題になることはないことが観察された。

敬語は、図1「③消極的配慮を示す言い方をする」として相手との距離を保つ方略であるが、事例6の敬語使用を見ると、図1「②積極的配慮を示す言い方」として、相手と親くなる意図でも使用され得ることがわかる¹⁹⁾。学習者にこの両者の使い方を学ばせることで、敬語の幅広さを示すことができると考えられる。

このエピソードでは、和尚と雄山や土郎達の会話はほとんど敬体であるが、和尚の料理に感嘆した時の発話は普通体になっている。このように丁寧体の会話の中で普通体が用いら



図7 事例6のシーン その1¹⁶⁾



図8 事例6のシーン その2¹⁷⁾



図9 事例6のシーン その3¹⁸⁾

れると、聞き手を意識しない独自の機能を有する²⁰⁾という点についても、話し言葉の特徴が提示できると思われる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、文体的特徴や語用論的機能の観点からマンガ作品『美味しんぼ』を分析してきた。今回の調査の参加者は、普段授業ではあまり扱われない言語行動が含まれた作品について、それらの意図を概ね的確に読み取ったと思われる。上記の結果から、マンガ作品を利用することは、様々な場面の話し言葉の習得に役立つことが認識された。今回は一作品の検証であったが、同じ分野でも異なる視点や文体的特徴を持った作品を複数取り上げ、比較しながら読んでいく練習も、日本語の応用力を養うには効果的であると思われる。

今回の調査においては、参加者全員がマンガを教材として利用した経験はなかったが、マンガの持つドラマチックな展開は、談話の面白さや奥深さを引き出すことに貢献したと思われる。今後、マンガの持つ情報発信力を活用できるような題材を模索し、日本語教材としてマンガの特性を十分に生かした授業を検討していきたいと考える。

注釈

注1) 「コンテクスト」とは「文脈」とも翻訳されるが、話し言葉における「文脈」は、話し手や聞き手が、当該の言語表現を話したり聞いたりするときに、役立てる状況のことである。「コンテクスト」は、すでに言語化された内容である「言語文脈」のほか、話をしていく場面や話し手、聞き手などといった「非言語文脈」も含まれる²¹⁾。

引用・参考文献

- 1) 日本経済新聞 電子版 (2017/9/6/0:30) : 「日本の漫画輸出に追い風 制作技術も伝授」, <https://www.nikkei.com/article/DGXLZO20796220V00C17A9FFE000/> (2017.9.17)
- 2) 国土交通省 : 「日本のアニメを活用した国際観光交流等の拡大による地域活性化調査報告書」, http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/souhatsu/h18seika/01anime/01_sousei_09honpen3.pdf (2017.9.17)
- 3) 因京子 : 「ストーリーマンガで学ぶ日本語と日本社会」, 『2007年国際學術検討會論文集』, 1, p.35 (2007)
- 4) 因京子 : 「マンガを用いた日本語・日本文化教育の可能性」, 『日本語日本文化研修生教育改善研究会報告書』, p.110 (2004)
- 5) Brown, P. and S. C. Levinson ; 齊藤早智子, 津留崎毅, 鶴田庸子, 日野壽憲, 山下早代子 訳 : 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』, 研究社, pp.85-92 (2011)
- 6) 日本語教育学会編 : 『新版日本語教育辞典』, 大修館書店, p.315 (2005)
- 7) Jenny Thomas ; 田中典子, 津留崎毅, 鶴田庸子, 成瀬真理訳 : 『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』, 研究社, pp.219-224 (1998)
- 8) 川村陽子 : 「対人コミュニケーションにおけるポライトネスの諸相」, 『人間と環境 : 人間環境学研究所研究報告』, 2, p.28 (1998)
- 9) 雁屋哲作, 花咲アキラ画 : 『美味しんぼ 94』 小学館 pp.7-8, p.12 (2006)
- 10) 9) と同書, p.14-15
- 11) 福田一雄 : 『対人関係の言語学 : ポライトネスからの眺め』, 開拓社, pp.98-100 (2013)
- 12) 雁屋哲作, 花咲アキラ画 : 『美味しんぼ 111』 小学館 pp.22-23 (2014)
- 13) 12) と同書, pp.23-24
- 14) 水本光美, 福盛寿賀子 : 「主張度の強い場面における女性文末詞使用—実際の会話とドラマとの比較—」, 『北九州市立大学国際論集』, 5, p.13 (2007)
- 15) 12) と同書, pp.64-65, 67-68
- 16) 9) と同書, p.157
- 17) 9) と同書, p.161

- 18) 9) と同書, p.166
- 19) 11) と同書, pp.131-135
- 20) 庵功雄, 高梨信乃, 中西久実子, 山田敏弘:『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』, スリーエーネットワーク, pp. 505-506 (2001)
- 21) 6) と同書, p.355
- 22) 日下翠編著:『漫画研究への扉』, 梓書院 (2005)
- 23) 熊野七絵, 廣利正代:「「アニメ・マンガ」調査研究—地域事情と日本語教材—」, 『国際交流基金日本語教育紀要』, 4, pp.55-69 (2008)

付表1 日本語教育別科 マンガ教材タスクシート

<p style="text-align: center;">『美味しんぼ』タスクシート</p> <p>1. (料理対決の会合の途中で栗田ゆう子の具合が悪くなったときの会話)</p> <p>上司：栗田さん どうした？</p> <p>栗田：すみません。風邪をこじらせて熱がひどくなったようです。</p> <p>雄山：馬鹿者！そんな状態で出てこれては迷惑だ！早く帰れ！</p> <p>土郎：くむ。</p> <p>栗田：申し訳ありません……</p> <p>-----</p> <p>(翌日、雄山は栗田が食欲がなくて何も食べられなかったことを聞いた)</p> <p>雄山：昨日は何を食べさせたんだ？</p> <p>チヨ：お粥にカレイの煮付け、出汁巻き餅、華菊の胡麻よごし。</p> <p>それに白菜の漬け物、豆腐のおみおつけ。</p> <p>雄山：そんなものでは食欲が出るわけがない。</p> <p>気が停滞しているのだから、はっと目が覚めるようなものを食べさせればよい。</p> <p>チヨ：なるほど。目が覚めるようだと胃も動くというわけですね。</p> <p>【問題 1】 下線部の言葉遣いはどうですか。</p> <p>雄山はどんな人物だと考えられますか。上の会話から考えてください。</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>2. (病気のゆう子が何も食べていないと聞いて、心配した会社の同僚達が土郎の家に料理を作りに来たときの会話)</p> <p>土郎：なに？ “栗田さん教授隊”？</p> <p>同僚：山岡さん、邪魔やから隣のこのほうへすっこんどってください。</p> <p>土郎：ここは俺の家だぞっ。</p> <p>チヨ：まあまあ、土郎さん。</p> <p>【問題 2】 下線部の言葉遣いはどうですか。</p> <p>土郎はどんな気持ちだと思えますか。上の会話から考えてください。</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>3. 「医食同源対決!!」について、ゆう子と土郎は「医食同源」とは「食べ物人の身も心も救うこと」だと話しています。</p> <p>【問題 3】 下線部の考えにあなたは賛成ですか。違う考えを持っていますか。理由も答えてください。</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>4. (土郎と雄山は親子だが、病気の母を苦しめたと思込んでいた土郎は、母の死後に家を出たとき、父と断絶していました。しかし料理対決を通して父と対決するようになります。取材と一緒に母の故郷を訪ねるとき、父から母の形見の皿をもらう場面での会話)</p> <p>雄山：おまえにやる。</p> <p>土郎：(白磁の皿！)</p> <p>雄山：土郎は家を出て行く時に私の作品蔵に入って私の作品すべてをぶち壊していったが、運良くこの皿だけは私の自室の戸棚に入っていたので無事だった。</p> <p>栗田：ご自分のお部屋に大事にしまわれていたんですね。</p> <p>雄山：着の身着的ままでおまえは出ていった。母親の形見を何も持っておるまい。</p> <p>-----</p> <p>(土郎は無言のまま皿を抱きしめている)</p> <p>栗田：山岡さん、お母様の主治医がおっしゃったことを思い出して。お母様は自分の命のあるうちに海原雄山を芸術家として大成させたいと願い、海原雄山も自分が新境地に達するところをお母様に見届けてもらいたいと思った。お母様が、海原雄山が満足する食事を作るために努力したのは、海原雄山が芸術としての美食を追求するための協力だった。あなたの両親は深く愛し合っていた。もうあなたに海原雄山氏を恨む根拠はないわ。(雄山は土郎の肩の上にそっと手を置く)</p> <p>【問題 4-1】 この場面で土郎は一言も言葉話していませんが、どうしてだと思いますか。</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>【問題 4-2】 妻の栗田は、土郎に何を望んだと思えますか。上の会話から考えてください。</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>5. (土郎は雄山から母の形見の皿をもらった後、初めて雄山に話しかける)</p> <p>土郎：この皿、一生の宝だ。大事にする。</p> <p>栗田：山岡さんが海原雄山氏にお礼を言った…</p> <p>雄山：そうか、しかし、なぜその皿をさっきからずっと抱えているんだ。</p> <p>土郎：この皿を抱えていると、長い間俺の心を閉ざしていた氷が溶けていくような気がするんだ。この氷が溶けたら、俺は息子としてきちんとした口を父親に向かってきけると思う。</p> <p>栗田：まあ、山岡さん！</p> <p>雄山：そうか。氷が溶けたら言え。私もおまえに話したいことがある。</p> <p>土郎：え、この上俺に話したいことが…</p> <p>栗田：山岡さん…</p> <p>土郎：心の氷が溶けて溶ける…苦しい…</p> <p>【問題 5-1】 「氷が溶けていく」とはどういうことを意味していますか。</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>【問題 5-2】 今後、土郎と雄山の親子関係はどうなると思えますか。</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>6. 「降り積もる鶴」で雄山と土郎から料理のもてなしを受けることになった紗寛和尙は、普段から全ての人に歌謡を使っています。</p> <p>【問題 6】 このことから、和尙はどんな人物だと考えられますか。</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>